

滑
絃
目
雜
決

未
上

特 別
~ 5
6326
11



清華雜誌卷之十一目錄

六月部上

初六	六月異名	日	小暑節	溫風至 萍蜃居壁 鷹乃學習	二	大暑節
日	腐草為螢 土潤溽暑 大雨時行	日	林鐘	日	日	日
日	源	三	蕤	日	日	日
日	三伏	四	黃雀風	日	日	日
日	泉	日	秋乃濤	日	日	日
日	冰解	七	冰室	日	日	日
日	供醴酒	九	天子幸滕 曼食	日	日	日
日	天既節	日	祇嘗食	日	日	日
日	小聖初度	日	去聖始死	日	日	日
日	月既	六	神合食	日	日	日
日	燃田	日	津陽	日	日	日
日	江心	日	鞠	日	日	日
日	燕	日	鞠	日	日	日
日	元	日	元	日	日	日

三 富士詣 四 仙崎蓮花頭 日 新祥會
 五 保壽寺 日 相國寺藏法 共 志波寺子日詣
 日 安壽寺市 七 嚴信寺 日 彦路原 共 御洗詣
 日 駒馬竹截 九 座摩御後 共 安宮子日詣 日 天南御後
 世下 東守後寺多院御忌 世 松尾寺 日 大後
 世二 節行 世三 名越後 日 小鏡寺 共 法大系
 世五 夏社樂 川原 日 乃食祭 日 上智茂社 日 月詣 日 後寺御後
 世七 夏社子日詣 共 施米 日 雷鳴陣 日 小幡地盤作
 日 松尾御河津 日 小春餅 日 水合 日 出干
 世一 川持 日 夏之腹 日 沸燵 日 軟癩



滑稽雜談卷之芽十一

六月之部

四時堂其諺編錄

○六月 異名 季夏 ○月令曰季夏之月 遯月

易經旦月尔雅百鐘淮南子 林鐘 ○律曆志曰林鍾六

月律也林君也言陰氣受任助莊賓君主種物使長大楹

盛也位於朱在六月 白虎通云林者衆也言萬物成熟

種類多也 瓜期 精陽 徂暑

和名 水無月 ○奥儀物之農の事もこれよりきりあつて

つとよりあつてつとよりあつてつとよりあつてつとよりあつて

つとよりあつてつとよりあつてつとよりあつてつとよりあつて

水無月 水無月 水無月 水無月 水無月 水無月 水無月 水無月

常五月 常五月 常五月 常五月 常五月 常五月 常五月 常五月

周防月 周防月 周防月 周防月 周防月 周防月 周防月 周防月

以非月 以非月 以非月 以非月 以非月 以非月 以非月 以非月

江漢書月 秘製 郭之古のてりては漢書月よりなり
漢書月 漢書 凡そ多しは漢書よりなり漢書月よりなり
松風月 日 雲多しは漢書よりなり松風月よりなり
本道院 大子

○小暑節

○素問馬玄臺註曰季夏小暑節初

△溫風至

○月令曰季夏之月溫風始至○朱

○蟋蟀居壁

○月令曰季夏之月蟋蟀居壁○註

○鷹乃學習

○月令曰季夏之月鷹乃學習○註

○腐草為螢

○月令曰季夏之月腐草為螢○註

○大雨時行

○月令曰季夏之月大雨時行○註

○土潤溽暑

○月令曰季夏之月土潤溽暑○註

○大暑節

○素問馬玄臺詩曰大暑節初五日

○腐草為螢

○月令曰季夏之月腐草為螢○註

○鷹乃學習

○月令曰季夏之月鷹乃學習○註

○溫風至

○月令曰季夏之月溫風始至○朱

○蟋蟀居壁

○月令曰季夏之月蟋蟀居壁○註

○小暑節

○素問馬玄臺註曰季夏小暑節初

△溫風至

○月令曰季夏之月溫風始至○朱

○鷹乃學習

○月令曰季夏之月鷹乃學習○註

○腐草為螢

○月令曰季夏之月腐草為螢○註

○大雨時行

○月令曰季夏之月大雨時行○註

○土潤溽暑

○月令曰季夏之月土潤溽暑○註

○大暑節

○素問馬玄臺詩曰大暑節初五日

○腐草為螢

○月令曰季夏之月腐草為螢○註

○鷹乃學習

○月令曰季夏之月鷹乃學習○註

○溫風至

○月令曰季夏之月溫風始至○朱

○蟋蟀居壁

○月令曰季夏之月蟋蟀居壁○註

○小暑節

○素問馬玄臺註曰季夏小暑節初

△溫風至

○月令曰季夏之月溫風始至○朱

○鷹乃學習

○月令曰季夏之月鷹乃學習○註

より即人汗の事と汗はまて林のぬきまぬもまふかたる汗を指
をまふの事なり ○西翁師を林のぬきまぬの事とも云 ○此は流
考あり林の汗を六月の星ある語の上此を林汗のほのこしと鍾あり
と云字心あり若くぬの事なり次師の事なりもあらずや下は

○暑日 ○詩經曰四月維夏六月徂暑 ○梁元
帝詩云季夏煩暑流金燦石 ○暑は暑を日なり也

○薰風 ○家語曰舜彈五絃之琴歌南風之詩
曰南風之薰兮云 ○唐太宗詩曰薰風自南來殿閣生微
涼 呂氏春秋曰東南之風曰薰風 ○六月南風曰薰風

○涼 ○字彙曰涼龍張切音良薄也 ○又曰涼
力張切音良輕寒為涼按以冰者涼薄之涼以冰者寒涼
之涼 ○御金曰涼を涼一物 細涼を涼一物にして云云 或云涼は涼を涼一物にして云云 涼を涼一物にして云云
大由集 涼を涼一物にして云云 涼を涼一物にして云云 涼を涼一物にして云云

○蒸 ○韓退之文曰自從五月困暑濕如坐深
甑遭蒸炒 ○月令註云土之氣潤故蒸鬱而為濕暑 ○是
六月の暑熱なり候なり ○六月の暑熱なり候なり ○六月の暑熱なり候なり ○六月の暑熱なり候なり

○雲霧 ○春秋元命包曰陰陽聚為雲 ○說文
云雲山川氣也 ○僧奉忠夏雲詩曰如山如火後如綿 ○
杜詩云奇峯突兀火雲升 ○陶潛詩云夏雲多奇峯 ○
和名を指す ○六月の暑熱なり候なり ○六月の暑熱なり候なり ○六月の暑熱なり候なり

○白雨 ○爾雅曰凍暴雨也 ○離騷注云凍雨
夏天暴雨也 ○李白驟雨句云白雨映寒山森々似銀竹

○揚氏漢語抄曰白雨和名無良左女○貞治時曰之と白雨とていふは

天降者中は揚言うはるるもあつたは丸く挽舟の舟手始りてはるるれ

くくまのまよふとる種なまう新式は油はるるれいそりあつてさるる

○白雨の字和名稱は津徳將としていふは難く難く難く難く難く難く

と訓とけり只るるのふりも係村は難く難く難く難く難く難く

候もあつたれい白もくまのまよふとる種なまう新式は油はるるれ

打荷着急雨吞月任行雲夜半蚊雷起西風為鮮紛とていふは

りり白もくまのまよふとる種なまう新式は油はるるれいそりあつて

あまの 白のまよふとる種なまう新式は油はるるれいそりあつて

△三時雨 ○荆楚歲時記曰六月有三時雨田家

以為其澤邑里相賀故曰喜雨

○三伏 ○郊祀志夏至後第三庚為初伏四庚中伏五

秋後初庚為末伏○史記曰秦德公二年初伏以拍禦盞

○孟康曰六月伏日初也周時無至此乃有之○正義曰

六月三伏之節起秦德公為之故云初伏伏者隱伏避盛

暑也○曆忌釋曰伏者何以金氣伏藏之日也四時代謝

皆以相生立春木代水水生木立夏火代木木生火立冬

水代金金生水立秋以金代火故至庚日必伏庚者金故

曰伏也○徐廣曰年表云初伏祠社磔狗邑四門也○

正義曰盞者熱毒惡氣為傷害人故磔狗以禦之按磔禳

也狗陽畜也以狗張磔於郭四門禳却熱毒氣也○初伏の

初は二伏も考へて九月の四月より六月の九月までとありて

伏といふは曆忌釋の說より初伏の祠社の義より考へて九月の

つらしては伏日及祭のちあるは初伏の祠社の義より考へて九月の

○黃雀風 ○五雜俎曰六月中東南風謂黃雀風

○土用 ○月令曰中央土其日戊己其帝黃帝

其神后土其蟲裸其音宮律中黃鍾之宮○註曰土寄旺

四時各十八日共七十二日除此則木火金水亦各七十

二日矣土於四時無平不在故無定位無專氣而寄旺於辰戌丑未之末未月在火金之間又居一歲之中故特揭中央土一令於此以成五行之序焉宮音屬上又為君故配之中央黃鍾本十一月律諸律皆有宮音而黃鍾之宮乃八十四調之首其聲最尊而大餘音皆自是起如土為木火金水之根本故以配中央之土土寄旺於四時宮音亦冠於十二律非如十二月以候氣言也○其多者月四孝
よあつり勿ゆるねも夏のちりともてし事五河の改守る所夏
のちり一軍の中用るそ中央土の多りありあつねは此流りとい
よたを今と同く時火土土七人とも相もともて候もして夏
流りし事や和信十八ちり十九ちりともて老いより大り候
るりちり四孝考十八日あきと十九日あきとも一其入と候と
十二時乃流りしと曆の日並十九日目可候と

△蒜并赤小豆と冷

○延喜式曰蒜是極熱草藥也

○時珍本草云葫蒜夏月食根携之旅塗則炎風瘴雨不能加夏月食之鮮暑氣○深氏抄蒜多也蒜多よあつねらあ

蒜多アキ
あつねらあ
あつねらあ
あつねらあ

○家紙いふ事案を蒜らり形を之為す○和信ちりよあつねら日蒜并赤小豆と冷ふ蒜の流を徳書よ出り内もあん赤小豆と異月と冷ふ水時後力元日及人日麻子小豆若七投と吾い無投と冷ふと冷とあつねらよ又と日赤小豆と冷ふ川流るるを徳書と旅津と推して案據の流と都とを流るるや

○泉注水掛

○尔雅曰水本曰源源曰泉正出曰濫泉側出曰汎泉湧出曰瀆泉所出同飯異曰泚異出同流曰

是日一日り八日とありしことりて多敷酌餉してよりよき酒を四の土器と
指へ上り張り御酒とあけて御息と入るに弘仁元年六月御酒の
しん始て御贖物とせられたるに云々御酒の置るの後より
起ぬるべく○おてけ酒膳酒の昆料ととも理をて贖物と今上御酒
是より

○供禮酒 一日

○日本紀曰志神天皇十九年冬十
月戊戌朔幸吉野宮時國標人來朝之因以醴酒獻于天
皇云○延喜式造酒曰醴酒者米四升麩二升酒三升和
合釀造得醴九升以此為率日造一度起六月一日盡七
月三十日供日六升御宮○今根原云一升酒と云々造酒の
と供するより一升と云々竹葉乃酒と云一升酒と云々今
久より昔は中米と嗜て宿と云て酒作るや此酒造酒用り
より七月酉より日毎より一升御酒の御酒始九酒と云々
と云河上原の人酒と送る始りより人作ると云々御酒と云々
今上御酒と云々

あまふち能と稱する時八醒りの酒と云々○日知録云久より就
ら酒といふは神代よりなること也

△醴

○説文曰醴酒一宿熟也○詩經曰以御

賓客且以酌醴○詩話云酒甘濁而不洌者○冠宗奭本
草曰今人又以葉造者蓋止是醴非酒也酒則用麴醴則
用葉○和信云酒の神は少く酒と云て供するも其製法は酒と云

○懸瓶を撤 一日

○和信事始門戸はつらつら柳瓶と今日
より多し揚言を今般と撤を御酒と云と今般の養もて冷し
信之月一日より其四月の中らるるもかや此酒と云

○天王寺勝鬘會 一日

○元享尺昏表資治 曰推古天

皇十四年秋七月太子德對御講勝鬘經太子曰吾昔為
勝鬘夫人時尺迦世尊説此經故吾能講此經講已天雨
蓮花大三尺乃製義疏傳世○今按は勝鬘太子は推古天皇

五王寺に納経ありて今も後醍醐天皇はなほ今も寺にありて毎年六月一日
後醍醐天皇はなほ今も寺にありて毎年六月一日
○梅陽
後醍醐天皇はなほ今も寺にありて毎年六月一日
○梅陽
後醍醐天皇はなほ今も寺にありて毎年六月一日
○梅陽

延暦寺六月廿四日

○元亨尺書曰寂寂澄姓三

津氏近列滋賀郡人也其先東漢獻帝之孫國亡竄民間
吾忘神之曆遙慕王化而至王孫賜滋賀地為采
邑父百枝富内外学嘗愁無嗣既而詣睿嶽左麓神祠求
子期七日至第四曉得靈夢其妻乃娠神護景雲元年德稱
御宇丁未八生澄焉時親族陳盛饒慶新產澄稍長詔其
時果者種色無一差隣里嗟異七歲受學十二投行表法
師出家延暦二十一年賜入唐求法詔二十有三年秋七
月從遣唐使胃清公浮溟海唐貞元二十一年夏五月乘
大使藤賀能船著長州即延暦二十四年也初延暦四年
秋七月澄上睿山縛草舎七年於山頂創一字名曰一乘

止觀院今之自刻等身藥師佛像安之十有六年勅近州
租充山廚供弘仁十有三年夏六月四日於中道院右脇
而寂年五十六十有一日右僕射藤冬嗣捧回戒允許之
詔來山中蓋慰初七也冬十一月上製哭澄上人詩六韻
降干山一時公卿才子和宸韻送山王臣遺愛如之十有
四年春二月賜寺額配紀元曰延暦遵先皇桓武之崇建也貞
觀八年秋七月勅益傳教大師○公事延暦元年六月廿四日
後醍醐天皇はなほ今も寺にありて毎年六月一日
○梅陽
後醍醐天皇はなほ今も寺にありて毎年六月一日
○梅陽
後醍醐天皇はなほ今も寺にありて毎年六月一日
○梅陽

○天貺節 六月

○書言故事曰會要云宋真宗

之巨謂妻曰貧乏不能供給共汝埋子子可再有母不可
 再得妻不敢違巨遂掘坑二尺余忽見黃金一釜釜上云
 天賜孝子郭巨官不得奪人不得取○以爲送行信
 物之移を△孟宗山 爲九四系山○楚國先賢傳曰孟宗
 母嗜笋冬節將至時笋未生宗入竹林哀歎而爲之出得
 以供母皆以爲至孝所感仕孫皓至司空○以爲送行
 俗を省物を移を△破山後路影剛而○晉書曰戴逵字安
 道譙國人少博學善屬文能鼓琴工書益其餘巧藝靡不
 畢綜武陵王晞聞其善鼓琴使入召之逵對使者破琴曰
 戴安道不爲王門伶人晞怒乃引其兄述述欣然擁琴而
 往後累召不起○以爲送行白牙鍾子期彭浩の事と云此後△蟪
 螂山 西院四系山○淮南子人間訓云齋莊公出獵有一
 蛄拳足將搏其輪問其御曰此何蟲也對曰此所謂蟪蛄
 者也其爲夷也知進而不知却不量力而輕敵莊公曰此

爲人而必爲天下勇武矣迴車而避之勇武閱之知所
 死矣故國子方隱一老馬而魏國載之齋莊公避一蟪蛄
 而勇武飯之○たのほ△白系山 室則四系南
 ○佛祖通載曰唐穆宗長慶二年白居易由中書舍人出
 爲杭州刺史聞烏窠榭和尚道德狂駕見之時烏窠因長
 松繫屈如蓋遂棲止其上居易問曰禪師住處甚危險師
 曰太守危險尤甚曰弟子位鎮江山何險之有師曰薪火
 相交識浪不停得非險乎又問如何是修法大意師曰諸
 惡莫作衆善奉行居易曰三歲孩兒也解修麼道師曰三
 歲孩兒雖說得八十翁翁行不得居易欽歎而去自是數
 從之問道○たのほ△盤戸山 新開五系南○神代卷
 曰天照大神乃入于天石窟閉盤戸而幽居焉故六合之
 內常闇而不知昼夜之相代于時八十萬神會合於天安

河邊計其可禱之方故思兼神深謀遠慮遂聚常世之長
 鳴鳥使互長鳴亦以手力雄神立磐戶之側而中臣連遠
 祖天兒屋命忌部遠祖大玉命掘天香山之五百箇真坂
 樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡下枝
 懸青和幣白和幣相與致其祈禱焉是時天照大神乃以
 御手細開磐戶窺之時手力雄神則奉養天照大神之手
 引面奉出畧之 ○ たのほを造りては山はく園は心の願ひあり
 是と地はくしりては山はく園はく美しき所なり
 ○ 漱百練抄曰室治元年六月七日祇園御糞迎也 ○ 御
 旅所社家記曰山融院御宇助正者住高过北東洞院西
 天延二年五月下旬夢助正宅可有神幸云翌朝見後園
 蜘蛛絲曳至祇園社因奏事於朝詔六月七日件所為旅
 所御糞迎始于此 旅今以四條京極公金為 △ 神供使 烏丸

樋口南惡王子町依舊例獻旅所之神供 今惡王子祠旅
 殿社前小祠是也 頭屋亭主着烏帽子淨衣出向御旅東
 街迎神糞頭屋召仕下女着娜體綿子由利輸入神供戴
 之次笄 申七刻 △ 神糞遷奉 遷御東街所奉獻件御供
 之次笄申七刻 先坂者六人 弦召長也着鎧被桃色衣
 者頭提金吾棒二行三人或帶弓 次神鼓三箇次神馬 司代被神馬別當
 出之代被神馬別當 次神馬 被神馬別當 次神馬 被神馬別當
 次社代 山本氏着 次水願房成就院次僧 被神馬別當
 雨皮箱 二麻上 次御會 二水願房成就院 次片羽屋 被神馬別當
 依例 今官土人 御榻 二神糞 次神糞 鳳大政所
 御所 二壞 次旅所 兼仕法師 素絹袴 兒神人 次 馬
 之震翰也 壞 次旅所 兼仕法師 素絹袴 兒神人 次 馬

御雨皮箱一御傘一次御太刀持仕次神輿少將井鳳八
之御榻二供奉諸人並轅町群行次因幡堂兼仕法師練
素兒神人駮冠持以上四座雜式烏素袍御供所之前
列立胡麻從神幸之後飯陣屋堂次金蓮寺本△旅所所納
御札之文字天延二年六月七日感神院政所此十三
而上書日融院御宇天延二年五月下旬頃以先祖助正
居宅高过東洞院為御旅所可有神幸之由有神託之上
後園場有塚蛛絲引延及當社神主政所司等恠之到尋
通助正之宅畢助正感夢去七箇日可有鎮座之由所司
等經奏聞之所以助正為神主以居宅可為御旅所之由
到宣旨此百十字上二十三
字大字之下二行

○河原原流北のり

能事川より河原を水而流麻を以て平栗河原と名ひ或は北原の流河原と
を河原と名ふる人其流の初とあるは北原の流河原の流すより北原の流河原と

○是御堂合或の以考熱堂なる流下の事

乃壯觀なり中幸より長安富人林亭内におきて畫柱を植て流を以て流の
流極高し一避暑會ともいふなり

○避暑會

中各旅林亭内掉益柱以錦結為涼棚設坐具召名姝間
坐通相為避暑會云々○水浄身の流なり

○北野九度後九日

三年七月十六日託右京七条坊婢文子欲棲右近馬場
其女甚賤不能營構終祠家側天曆元年六月九日始移
北野○古世もて無氣令自九度流と稱て南の川を流すを以て
左向祝言の堂あり神ありは其九度と稱て神あり下なり是府府地
遷居の日よりよき九度九日の事と用ひたりと云ふ事流の男女多侍り

○古跡種形九日

○當山の蓮華寺古跡種形の因蓮
池と云ふなり妙蓮寺と稱しと云ふはけふと云ふは種と云ふは九日の
男子神輿と稱するなりと云ふと持ありて候して是女の子なり

母を有るは種を海を移し入る南山の傍に筑まるとは法あり
子別上つひの者種を形と作せざるは入る新真に振るはるは法
依りてその傍に種をのりて種を移し種とすは法あり種を
四口の傍の暗下とあり種を移し種とすは法あり種を
種とすは法あり種を移し種とすは法あり種を移し種とすは法あり

○尾花沃馬市 出羽

出羽

○每歲六月中旬引出奥羽兩國

馬買者着價而馬主不諾則敲馬主之頭一打則百錢二
打則二百錢如踏仆則金一分増價亦一興也 和漢三才

五十

○御體御卜十日

十二月十日此日不可有官奏 裏書曰弘仁或云凡御体
等六月十二日此日不可有官奏 裏書曰弘仁或云凡御体
上卿參議著陣外記跪小庭申
云神祇官御躰御占候上卿仰云奏案令進 外記祢唯

退出上卿度外座召官人令敷膝突着神祇副一人中搦
 奏案於文杖入自敷政門進膝突奉之上卿退出次率神
 祇官人參入官人取函授外記件函木函以墨塗之以木
 釘指之上卿進御所付藏人奏之留御所置上卿退出○
 古語拾遺云至于難波長柄豐前朝白雉四年以小花下
 齋部首作賀斯拜神官頭今神祇伯也令掌叙王族宮内禮儀
 婚姻卜筮事夏冬二季御卜之式始起此時○公根原曰
 神祇官の友人一日り切官をこころし是より上高き事ありて内侍は
 付て奉りし是は言上の御事ゆつて是れ人事をたの奉りあり
 此事は六月壬子月とあるは是れ神祇の事とす

○月次祭 十一日

神祇官率御巫着西廳上卿着神官北門座群官着南門
 外西掖幄外記申供神物并備畢由於上卿上卿着北廳

○江家次第 日月次祭

瘞務於神祇官打之

座御巫坐西廳前座左右馬寮各引馬二匹神部祝部等
 入立西廳南庭神祇官人降座次上卿以下降着廳前庭
 中臣進宣祝詞十段共詞退上卿以下拍手御巫廻見幣
 物始自伊勢遠社幣物納五百餘所宮庫朝集使入京日可付送之
 訖史東其由上卿以下退出○公根原云これ足利今食事
 上卿神祇官の門の内東に搦て是れ借神の具をとりて是れは廳に
 事を行はし神祇官は官掌祝詞をす神祇官の所ははく神官の
 代つより上卿搦て搦の所をきて御巫幣物とみる候はこれ六月
 二月二日度社内記の事に候はし事と云はれし也
神祇官 夏の祭の事より月次祭より候はし神の祭なり

○神今食 十一日

神今食 十一日
 江家次第 日中和院神今食
 日中和院在 前二日令左右衛門掃除神嘉殿裏書曰神
 殿也 前後庭并南門前東西又令右近衛府掃除中和
 門以南脩明門以北當日戌時御腰裏幸中和院小忌王

○熱田祭十四日

郡所祭神一座今為座○神代卷云素戔嗚尊勅地曰汝是
可畏之神也敢不饗乎乃以八甕酒每口沃入其蛇飲酒
而睡素戔嗚尊拔劍斬之至斬尾時劍又少缺割而視之
則劍在尾中是号草薙劍天村是也此今在尾張国吾湯市
村即熱田祝部所掌之神是也○是と熱田祭社も之と書か

○津嶋祭十四日

○神社啓蒙曰津嶋神社在尾張
国海部郡津島也所祭之神同祇園素戔嗚尊中稻田姬
東八王子西○社家註進云人皇三十代欽明天皇元年
己未來臨于此地矣又每歲有御葦神事者上國中疫疾
凌異等○此社祭由の古祀之稱は此の津嶋流りも、形上を海とて
尤神靈の御事多しとありて中一津嶋流の社、毎歳今自はり
葦藪ありて是に法療の社、此具は此の葦と河海も接する所ありて

必疫病ありと云後早て後具と水も流りて是の事也津嶋流葦藪と云

○御室澤時祭十五日

○諸神根元抄云天延三年
院六月十五日始被奉走馬勅樂東遊御幣等使左少將
藤理兼左右御馬有五足左右近官人供奉此後中絶崇
徳院天治以後毎年相續○公事根元云御室の澤時祭御幣等
の儀大いに奉りしなり一供願との五足奉花と云御室澤時祭六月
り始りありて是を勅樂等とあり天延三年の奉花の事あり
神代の以後の事ありと書かありて是の事也

○小角寺祭十五日

○山城名所記云西天王社在
吉田齋場所西所祭同祇園欽○名録を例案い月吉神樂基
英一寺にありて懺悔の法も感神院に大王子と事とて奉りしなり西天は
手もこの社古に社を後院社兼二所澤ありて園後村の社と書かあり

神一社とあると神を宗見るとして神霊を信院門にありと記すの
 かりに信武吉田を信院二村の人と記すを以て廟を信院と相係して神約
 とあり神一社の家系を以て神霊を頭として左に日なり吉田信院門の
 林并杉を以て信武と相係しと記すあり今日吉田の各家は信武を以て
 神と相係するに信一は信武を以て祖と相係し地門の各門を以て
 寺といひ一族の墓を以て相係しと記すありの事と見えり

○江戸山王祭十五日

田馬場 羅浮子一卷神社考曰江戸山王太田道灌持
 資長祿元年築江戸城文明年中移山王権現於城菅之
 中○一説云は神は信武を以て祖と相係し地門の各門を以て
 寺といひ一族の墓を以て相係しと記すあり今日吉田の各家は信武を以て
 神と相係するに信一は信武を以て祖と相係し地門の各門を以て
 寺といひ一族の墓を以て相係しと記すあり

○江戸名所記云山王社在永

三國代もて神國の由を神とて言ふは異なり信武を以て祖と相係し
 五卯己未酉言の事と信武を以て祖と相係し地門の各門を以て
 寺といひ一族の墓を以て相係しと記すあり今日吉田の各家は信武を以て
 神と相係するに信一は信武を以て祖と相係し地門の各門を以て
 寺といひ一族の墓を以て相係しと記すあり

○十五日記 鞠天王今言

祇曰在備後国沼隅郡鞠浦所祭之神同祇曰○神社考
曰備後凡土記曰以是為北海武塔神通南海神女時事
武塔神乃進雄神之別号其祠見今在彼国曰疫隅社
按曆家者流之外未見干上代神記也蓋中國影向經歷
之地歟○此神名を鞠王と稱し鞠の神實也と云此の古記あり

○神社啓蒙曰疫隅神社

○元真寺万紀會十卷

○元亨尺谷寺像曰元真寺

者上宮太子討守屋時蘇馬子又拾營寺故於飛鳥地創
之推古四年成始曰法真寺後改焉天皇設無遮會度之
於是紫雲如蓋降覆殿塔變為五色或作竜鳳形太子曰

天感造寺故有祥雲○延喜式主稅式曰凡本元真寺每
年六月十五日万花會十月十五日万燈會等料以大和
国油一斛正稅三百束充之○此寺今亦乃て瓦屋とせり
塔一基とせり

○富士傳十五

○本朝文粹第十二載都良香富

士山記云富士山者在駿河国峯如削成直聳屬天其高
不可測歷覽史籍所記未有高於此山者也其聳峯鬱起
見在天際臨瞰海中視其灵基所盤連亘數千里間行旅
之人經歷數日乃過其下去之顧望猶在山下蓋神仙之
所遊華也○神社考曰富士緣起云孝安天皇九十二年
六月富士山涌出初雲霞飛來如穀聚無嶮岨後頂上五
磐石出其落下跡作溪澗取郡名而曰富士山形似合蓮
華絕頂八葉層々到茅八層中央有大窪窪底湛池水色

如藍染物飲之味其酸治諸疾池傍小穴形如初月穴中
或燃出黑烟雨土沙或白雲金光映徹現鬼神形赤黑色
古老傳云昔大綱里有老翁孃共居翁愛鷹孃飼犬後住
乘馬里作箕為業竹節中得一女其長一寸餘奇之裹綿
養之經十六月漸長成能行步容貞端嚴言語和雅于時
天子詔諸国撰美女令獻之采女使者至駿河国富士郡
乘馬里宿老翁宅終夜有光使者怪問答曰我女之光彩
也使者窺之其女甚美也於是謂云天子求女汝誠當矣
女不從使者奏事于時女語父母曰親子之愛艱育之恩
誠重誠深雖然我久不可住今我登山去乃上富士山入
巖岨云延曆二十四年託曰我號淺間大神平城天皇大
銅元年立社祭之改乘馬里号一齋京所謂翁者愛鷹明
神也孃者飼大明神也二神共住新山宮○又曰羅或曰
淺間大明神本地大日如來或曰弘法造諸尊石像○神

社啓蒙曰淺間神社在駿河國不尽郡一宮記曰号富士
 権現是也大山祇女木花開耶姬命也○
 此是と云々只高世地大男と有月は月宮を請ふと云
 今宮一法を以て只高難の事行つる常々大のく
 請てまゝも面山の源を以て日清を以て
 今て通算のりゆ方頂上にて朝の
 種は想と現す或は陸地の事定の
 けるあるやと云々其中日の
 其宮よまて山には多と云々
 高橋の下向乃の持取と云々
 山には多と云々其宮よまて山には多と云々

万葉集と不登願不登置雷者月乃十五日尔消者其夜布里家里 金朝臣 金村

○竹生島蓮華頭 十九日

江州湖中其巖石多水精宝珠本朝五奇異之其一也傳
 言孝靈天皇四年江州地折湖水始湛駿列富士山忽出
 焉景行天皇十年湖中竹生島初涌出云
 形建基基初建寺 ○神社啓蒙曰竹生嶋神社宇賀御魂
 置并才天女像 神座 聖武帝天平三年辛未竹生島神頭形 ○
 江州より今日 蓮華の頭と云々 竹生島は昔は竹生島と云々
 此島より今日 蓮華の頭と云々 竹生島は昔は竹生島と云々
 其地は竹生島と云々 蓮華の頭と云々 竹生島は昔は竹生島と云々

○新祥濃 十九日

○續日本紀曰文武天皇大宝元

本敷篠於臺盛其上獻高貴家又於社邊賣之○河海抄云
みじ川社より流出て其の社賣母片是の社のより海邊通る川之

拾遺集 夏事も暑きほどぬるまじしを新あの中夜の水 志法

○鞍馬竹截 廿日

十禪師也孝德帝始置此一日望北山有紫雲延出寺向北行尋

雲起處至鞍馬寺日已暮敲燧焚木禪坐居數日一夜女

鬼來向火延起入堂後朽木中鬼逐至怒自動唇延念毗

舍門忽朽木自倒打殺鬼翌日大中大夫藤伊勢人入山

見延卧問曰師何人何故卧乎對曰我來此已五日而不

食故卧耳大夫便洗粳米飲白漿漸薦膳延詰來此事及

婦鬼死大夫便署延為寺主夏五月延修護摩日中大蛇

自北嶺來目如電舌若火延誦毗舍門咒蛇俄自斬為段

段三日後大夫來見段蛇飯閣以聞勅發役夫五十人弄

蛇靜原山俗呼其地為大夷峯延喜中逝○當寺縁起

曰招提寺鑽禎鑑真和尚宝龜中占居於此有雌雄大地

和尚持念故一蛇忽死禎向一蛇云此山水乏可施水蛇

誓去俄而清泉涌出今開伽井是也○寺縁起云同宣二

十日竹伐の事具の蓮華舎と云是中具軍の山峯延和尚の呪力と

大蛇居るところの遠志舎の傍に後法或云附と云は園の鑑禎和尚

乃蛇と稱して園也と云ふ好よ好よ一蛇則後法禎と云ふ今此園西井乃禎と

云禎と人味と云ふと執事と云ふの謂也○竹伐の時中大夫竹の竹の雌雄

唯一雄の竹根あり唯一井根ありと云ふ竹の竹の事と云ふと禎と云ふと

禎の堂のなる者云と云ふ信託内傳にて禎禎禎は事修府和傳あり

子傳の事ありと云ふ信託内傳にて禎禎禎は事修府和傳あり

終末の二巻と云ふ推して禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと

いふと信の後禎は有るの定らし信事と云ふと禎と云ふと禎と云ふと

て禎の信の禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと

禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと

禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと禎と云ふと

○後宇多院御忌 廿五日

○帝王畧紀曰後宇多院亦號大覺寺諱世仁龜山太子母皇后菟子左大臣實雄女也文永十一年三月廿六日即位治天十三年弘安十年十月十六日禪位德治二年七月廿六日落飾法名金剛性元亨四年六月廿五日崩壽五十八葬蓮華峯寺○州山集曰一日遊東寺見蓮僧語曰昔後宇多院脫履之後寓止于此有年矣今之長僧房即厥許也蓋帝每傷與大師不並世不曾親見以故眷々也至今事御容者尚有北面之稱為每歲六月廿五日修御國忌時乃獻此蓮花今年花開太早恐不遇御忌也余聞之感動不已余嘗覽國紀帝厚信仏乘而布德化民物且文字之美延久帝後無復聞焉終為出家荷負仏法法諱金剛性又曰心首依宇多口融之例灌頂于東寺余憑之弥信其所傳逐成律記之僧房非御座底事此留君為慕南山月親參東寺雲金盤

偕瓦鉢玉帶狎緇裙國忌年々久何時忘芳勲○此處は繪或と信せしむる所なり御座と信せしむる所なり一と記すは師の來の今何付座事と曝すはよるなり是後宇多院御座と云

○橋立 廿五日

○風土記曰丹後國与佐郡良方

右速石里里有長大崎長二千二十九丈廣九丈二尺是名天橋立所謂陰陽二神立於天浮橋之上是故得此名又名久志濱又久志之渡○今信久志之濱と切るとんる大橋の因は橋立の社傳は是二神のたつたるに古記書に六月廿六日橋立の社に是神ありと記すは今日之世に文殊の舍の事なり

○大後 三十日

○先代旧事紀曰六月三十日天皇

命忌部卜部連行難越祓除此月是當去來諾尊來自黃泉除難而至於祓解場之月也故神代已來行祓解九代已降天皇咸親至菴田河瀬与諸王諸卿行之祝言大祓

もげると後の人からいぬらうも何ん儀と云の儀ハ一帯在官の時を
とて儀告の事もさういふ事なりとてけつれいふ事ハ、昔も昔も
申れ始り人も明り向一もの儀集の儀をいふ人もいふ人も
奇ともいふ人もいふ人もいふ人もいふ人もいふ人もいふ人も
乃ていふ事なりとていふ事なりとていふ事なりとていふ事なり

是もいふ事なりとていふ事なりとていふ事なりとていふ事なり
○ 御舎儀集の儀をいふ人もいふ人もいふ人もいふ人も
○ 御舎儀集の儀をいふ人もいふ人もいふ人もいふ人も

○ 小籠の神

神及蠅聲邪神復有草木成能言語者一書曰葦原中国能言語夜者若煙火而喧響之晝者如五月蠅而沸騰之
○ 眞儀集の儀をいふ人もいふ人もいふ人もいふ人も
○ 御舎儀集の儀をいふ人もいふ人もいふ人もいふ人も

拾遺

○ 鎮火祭 廿日

火祭 ○ 義解謂在宮城四方外角卜部等鎮火而祭為防火災故曰鎮火 ○ 公事根原もいふ儀なりとていふ事なり
○ 御舎儀集の儀をいふ人もいふ人もいふ人もいふ人も

○ 道饗祭 廿日

饗祭 ○ 義解謂卜部等於京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者不敢入京師故預迎於路而饗過也 ○ 東鑑北白疫疔流布時被行四角四境鬼氣祭對治 ○ 公事根原云是疫疔の事なりとていふ事なりとていふ事なり
○ 御舎儀集の儀をいふ人もいふ人もいふ人もいふ人も

九十八石一斗四升文殿官人依官宣注東西北僧數三
五合又令仰拔書殿以頭以下為使或差副藏人所
山使各十衆令注人數為事短也大臣着陣大弁以下候床子史生
人合五覽管文件人數米益勘於大弁覽畢返給次大弁着陣依
文官所造也大臣氣色仰官人令召史史待參管文大臣加檢察付殿
 上并着藏人奏返給大臣仰宣旨趣於大弁大弁退仰更
 即仰可給日以文殿人為使着延引者立禮於山頭令知
 其由使受料物班給云近例官成下文送於諸寺使來請
 取之○云根原日施年奉心あるわらわらふのうらやまなり
 白は原系、云後と施するもこの陣よりして人の初めと奉圖と
 六月の施まつたを多行に徳のたまふと延陣より施するは
 神合 二月のうらやまを先んじておぼろふは秋のあけい ちち

○雷雨陣

以上秋節依宣旨立昌秦大將以下帶弓前候御前孫庇

額間左右兵衛立南庭敷雷鳴御座鳴盛時分陣遣后殿
 外衛督佐候殿上者帶弓前候簾中解陣○延喜式近左
 式曰凡大雷時左右近衛陣御在所又左右兵衛直参入
 陣紫震殿前内舍人立春真殿西廂不必待圍司奏○云
 申根原曰云々あまらうにわたりていへばは月をみよまかに
 雷乃あまを愛し秋の小雷のあまをむむむの御は夏さうにひて
 ともくうらうはくもまては西をみよまかに六月のあまのせられし
 ともくや抑雷鳴の陣より昔雷の勢より及らうは信連いさね以下を備の
 改ねてらるるも善くして内殿の孫殿を供して内門を中候しせり
 一たりお世に下つたれまゝと云ふもいへば南殿の示れをよま
 ぬもと雷鳴の陣より也大内の子孫を雷鳴の法やとせりや
 雷のあまをいへばとく候あり是まは内門は清浄殿の存
 存應てねらるるもいへばとく候あり○古今お世にわたり
 つたへては後世をいへば雷電の法やとせり

川地よりいさよと細と用也石を引きとけりと注すいさよといはれり
物と記す記すと云々記す相傳相傳乃て炬火と傳傳漢傳漢傳とすとす抄撮抄撮とす
炬火と傳傳乃て記す記すと云々と云々抄撮抄撮とす

△
繅

○文選一卷張衡西京賦曰釣魴鱧繅鱧鮒鱧鮒鱧鮒
注繅所貫切細如箕形狹後廣前名也○順和名曰繅師說

左天○和名夏川漢傳國名細り其形如魚魚類を其を魚網と云
万葉集上上瀬不務川年下瀬不細刺波山川母儀氏奉流神乃御代鴨柳中記

和名集 賀茂川の注す注すと云々と云々和名集 賀茂

○夏瘦

○万葉集廿日有吉田連吉田左字曰石麻呂所謂仁教之子也其若若為人身體甚瘦雖多喫使形似
飢人田田此聊作斯歌以為戲戲嘆也 大伴宿禰家持

石麻呂余吾物申寸夏瘦余言跡云物曾武奈伎取食
報答歌一首 吉田連石麻呂

○日知書時化曰夏月夏月多傷多傷もて身體甚瘦甚瘦人多人多信信と云々と云々

醫書醫書ハハ人人信信と云々と云々補丹補丹臺玉案曰

注夏病者遇春未夏初使覺頭疼脚酸神思困倦飲食減
少四肢消瘦軟弱而力乏 子和曰痿之作也皆五月六

月七月之時也午少陰君火之位未濕土庚金伏火之他
申少陽相火之分故痿癰此三月内為勢也故病痿之人
其脉浮大也○按不注為病之信信と云々と云々

